



### 四季の梅里雪山

中国雲南省の梅里雪山の麓に、1999年から2001年までの延べ12ヶ月間、滞在する機会を得た。その間、京都大学学士山岳会の要請を受けて遭難者の捜索を行う傍ら、四季折々の山の姿と人々の暮らしを撮影した。現地の人々は、梅里雪山の主峰を「カワカブ」と呼ぶ。チベット語で「白い雪」という意味だ。滞在の拠点としたのは、約300人のチベット人が暮らす明永(ミンヨン)村で、その村長チャシと出会い心から信頼するようになったことが、3年に渡るカワカブ通いの動機になっている。山麓の人々は、人間の力を超越する山に畏敬の念を抱き、生活に恵みをもたらす山を実の親のように慕っている。山には、魔性、神聖、豊饒という側面があることを知った。

その土地の風景を表面的に見るだけでは、映画のスクリーンを観るように、風景は遠い世界のこととして私たちの前を通り過ぎてゆくだろう。情報だけが残り、世界は狭くなってゆく。しかし、そこに暮らす人と出会い、人を好きになると、風景は広がり深さを持ち始める。そんな視点を持ちながら、横断山脈やヒマラヤの風景と出会ってゆきたい。

山麓に暮らす人々と知り合ったことで、私の中で登山の対象でしかなかった「梅里雪山」が、生命と魂を育む「カワカブ」に変わっていった。そのような人々と

の交流を交えながら、聖山の四季と暮らしを紹介してみたい。

#### 「冬」一年で一番好きな季節

12月、明永村に雪が散らつくようになり、色あせた胡桃の葉が散ってゆく。整然と耕された畑に、早くも麦の芽が顔を出し始める。農閑期にあたる12月と1月には、結婚式が多い。初めて見た結婚式は、隣村の村長家のものだった。参列者は数百人にもなり、婿入りする次男が家を出るときには、親しい知人たちが号泣しながら彼の後を追った。カムパ人の感情の激しさを見せつけられた。

1月、旧暦の正月に向けて準備が始まり、街に暮らす人々は帰省を始める。村長家の13才の娘も、遠い街の学校から帰ってきた。子供たちも手伝って、お菓子や新鮮な肉を使ったご馳走をつくる。

2月、待ちに待った正月祭りが始まる。村人のほとんどは、正月の時期を一年で一番好きな季節だという。半月から1ヶ月も続くお祭りの間、ほとんどの仕事は休みで、歌い踊りながら酒を飲みご馳走を食べる。山へ祈りと感謝を捧げる儀式が、自然に組み合わさる。祭りのある日、村長の父がカワカブに伝わる伝説を話してくれた。

「昔々、チベット人同士の戦争があったときのことで。敵の兵士は、カワカブを見たことがなかった。明永村が戦場になったとき、敵は初めて見るカワカブの美しさに恐れおののいて、山に見える場所での戦闘をやめたということだ。

こんな話もある。カワカブの懐には、不思議な湖があるのを知っているか。普段は見えないが、それが出現すると良くないことが起こるのだ。お前たちの登山隊が遭難したときも、湖を見たものがあるそうだよ。」

祭りの時期、標高の高い場所は白銀の世界となるが、村の周辺では麦の若芽が畑を覆い始める。

#### 「春」チベットの桃源郷

3月、桃の花が村中に咲き始める。真っ白な梨の花と、桃色のすじが入った林檎の花も続く。畑では、麦

の葉が20～30センチになり、生えすぎた株の間引きをする姿が目立つ。

4月に入ると、カム語で「ゴーゴー」と呼ばれるアミガサ茸が森に生えて、子供や若者は茸採りに忙しくなる。「ゴーゴー」とはカッコウの鳴き声を表す言葉で、その鳴き声が聞こえる頃に出る茸という意味らしい。この時期は森や畑に様々な山菜が生え、食卓に上る。樹木の花が一段落すると、アヤメや黄色い牡丹が畑の小道を彩る。

4月のある日、2人のお婆さんが続けて亡くなった。2人は親子で、50歳の娘が先に亡くなり、その3日後に、73歳の母が後を追うように他界した。2人は仲良く並べて葬られ、愛用した杖がアヤメの咲く墓前に供えられた。

5月になると標高の高い山腹に、シャクナゲやツツジが咲き始める。横断山脈で200種以上確認されているシャクナゲ・ツツジ類は、様々な花をつけながら7月まで咲き続ける。

## 「夏」 モンスーンの恵み

6月は、麦の収穫の季節。家族総出の麦刈りに始まり、耕耘した畑にトウモロコシの種をまいて、乾燥させた麦を脱穀するまで、猫の手も借りたいほどの忙しさだ。一連の作業が終わる頃、雨季に入り山の見える日は少なくなる。

7月から9月にかけて、標高3000メートル台の森に松茸が生える。以前は自分たちで食べていたが、10数年前から、そのほとんどが日本に出荷されている。

初めて自生する松茸を見たのは、チャシ村長に案内してもらったときのことだ。1年目の夏は頼んでも断られたのだが、3年目によく同行する機会を得た。山の急斜面を駆けまわって探すあり様は、まるで登山をしているようだった。森を歩いていると、松茸の香りは、森の香りを凝縮したものかも知れないと感じる。山には様々な種類の茸が生えていて、松茸よりおいしい茸が幾つもあるという。村長は、日本人がなぜ松茸だけに大金を出すのか心底不思議がっていた。雨の中で撮影をしながら必死に村長を追いかけた私は、ずぶ濡れになって疲労困憊し、数日間寝込んでしまった。

夏は放牧の季節でもある。家族の内の1人が、雌ヤクやゾムと呼ばれる高地性の牛を伴って牧草地へ上がり、夏小屋で暮らしながらバターやチーズを作る。放牧地の周辺では、高山植物が色とりどりの花を咲かせる。

8月の終わりには、春に花を咲かせた桃や梨、林檎の実が、食べきれないほど実る。特に、甘酸っぱい李がうまい。

9月に入ると、風の気配に夏の終わりが感じられるようになり、蕎麦の実や胡桃の収穫が始まる。10メートル近くにもなる胡桃の木に男が上り、竹竿で実をたたき落とす。下では妻や子供たちが待ちかまえて実を拾うのだが、固い胡桃の実が頭に当たるとかなり痛い。歓声を上げながら、胡桃をかごに入れている。

## 「秋」 澄みわたる空と巡礼

10月、トウモロコシが色づき始め、収穫が始まる。刈り取った実を屋根に干すと、村が黄色く染まってゆく。雨季が明けて、夏の間山を覆っていた雲が嘘のように晴れわたり、カワカブの巡礼の季節を迎える。

徒歩で10日以上かかるカワカブ一周の巡礼は、標高1700メートルの川沿いから標高4800メートルの峠まで、険しい登下降を繰り返す山道に行くものだ。布団と生活用具を一式背負い、命を賭して雪の峠を越えてゆく巡礼者の思いは、登山装備を持って歩く私たちには測り知れない。村長の弟に同行してもらった2回の巡礼行は、カワカブに滞在した時間の中で特に思い出深いものとなっている。

11月、紅葉が山から村に下りてきて、胡桃の葉が色づき始める。トウモロコシの収穫が終わり気温が下がってくると、豚肉祭りが始まる。各家でその年一番大きな豚を屠り、脂肪の塩漬けを作り、新鮮な肉を食べるのだ。その日は1日だけのお祭りで、昼から酒を飲んでもよい。村長家の家族と、かまどの炎にかざしながら食べた、あばらの骨付き肉や蕎麦粉の腸詰めのおまさは忘れられない。

11月の末、まだ紅葉が終わりきらない頃、突然初雪が降り、冬の到来を告げる。山は白く染まり始め、また「一年で一番好きな季節」が巡ってくる。

(YunXiSi No.005・2003年より)